

エピソード82

おじいさんから「この子を頼んだど」
と言われました



このエピソードでは、教職
経験15年目の30代男性の
先生の経験を紹介します。

なみちゃん

小学校教師として25年以上の経験
があります。

私が6年生のクラスをもったきに、在籍していたのが菜々美さんです。菜々美さんはお母さんと2人暮らしをしていました。前担任からの引継ぎでは、不登校の傾向があること、お母さんがあまりコミュニケーションが得意ではなく、関わり方が少々難しいことなどが挙げられていました。

担任として初めての家庭訪問の際、私はすぐに違和感を覚えました。「どうぞ。」と、ご自宅の居間に通していただいたとき、部屋はカーテンが閉められたままの状態、私のために出してくださった座布団は湿っていました。その後、お母さんがうつ病の診断を受けていることが分かってきました。

お母さんの調子が悪い日は、朝食を摂ることや着替え等も十分ではなかったので、養護教諭と連携し、お母さんへの連絡を継続的に行う中で、登校支援を行いました。その成果もあり、遅刻する日もありましたが、ほぼ毎日学校に通うことができました。

そんなある夏の日、お母さんの訃報を受けたのです。私は、管理職に事情を話し、菜々美さんのもとに急ぎました。私が駆けつけた先には、残された菜々美さんとおじいさんの2人の姿があったのです。おじいさんは、不安と焦燥の中で私に言いました。「先生、この子を頼んだど。」その日から菜々美さんとおじいさんの2人きりの生活が始まったのです。

小学6年生の女兒と、今まで離れて暮らしていたおじいさんとの2人暮らしですから、順調に生活が進むわけではありません。時に、おじいさんはいら立ちをあらわにし、感情的に菜々美さんに当たりました。「どうして、言うことを聞かないんだ。」「俺は精一杯やってるだろう。」担任が家庭訪問すると、飲酒している場面も多く見られるようになってきました。

菜々美さんに家庭の様子を含め、丁寧に面談を行いました。「おじいちゃんは酒を飲むと暴力をふるうから怖い。」「学校の帰り道、死にたくなった。」私は、すぐに管理職に報告し、児童相談所、役場職員、保健師、民生委員、医療関係者（おじいさんに疾患があった）等を含む支援チームが発足することになったのです。

支援会議では、家庭における情報を共有するとともに、支援に役立つリソース（資源）を洗い出しました。様々な立場の人で支援チームを構成することで、教師が気付かないことに気付いたり、教師の範疇を超えたアプローチ方法を学ぶこともできました。

様々な関係機関の協力を得ることで、支援の方法が広がりました。夜中に怒鳴り声が聞こえるという情報があれば、役場職員や民生委員と一緒に住宅の周辺を見回りに行ったり、保健師の定期的な訪問により、おじいさんの健康状態を把握するだけでなく、家庭内の状況も知ることができ、対応することが可能となりました。

また、同じ地区に暮らす親戚の協力を得ることで、おじいさんだけでは対応できない状況についても乗り越えられることが多くなりました。

その後、おじいさんの持病の悪化に伴い、話し合いの末、菜々美さんは児童養護施設に入所することになりました。



なみちゃんの一言

- この先生は、菜々美さんのこと、おじいさんのことが何年経っても心に残っているそうです。

お・し・ま・い



なみちゃん

ナレーション 浪岡美保
(北海道教育大学大学院 修了生)

イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)